No Border

MESSAGE

ヤドランカ・ストヤコヴィッチ
Jadranka Stojaković

プロフィール

サラエボ(現ボスニア・ヘルツェゴヴィナ首都)生まれ。ダルマチア(現クロアチア共和国のアドリア海沿岸地方)育ちのシンガーソングライター、画家。18歳でベーシストとしてオスロでデビュー。サラエボ大学哲学学部をへて、サラエボ大学美術学部卒業。1984年、サラエボ冬季オリンピックのテーマ曲の制作と歌唱により、国民的シンガーとなる。同年、旧ユーゴスラヴィア芸術大賞受賞。1988年から日本に拠点を移し音楽活動、絵画制作を行う。TBS「筑紫哲也のNEWS23」エンディングテーマ、TBS「神々の詩」挿入歌、NHKドラマ「恋の手裏剣」主題歌、NHK教育「あつまれじゃんけんぽん」主題歌などTV番組への楽曲提供も多数。2007年、英国の音楽雑誌「SONGLiNES」でTop of the World。2009年、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ音楽賞受賞。2010年10月20日徳間ジャパンからCDシングル「アマリア」(ヤドランカ)を発売。ヤドランカ オフィシャルウェブサイト(http://jadranka.jp)

私にとっての「ふるさと」とは、土の匂いやあのときの魚の美味しさと言った記憶が残っている場所です。だから後年、ノルウェーのきれいな空気を吸ったとき、そこも私の「ふるさと」になりました。そういう体験がいくつもあって、それぞれの場所が私の「ふるさと」だと考えています。もちろん日本もそのひとつ。

私は旧ユーゴスラビアのサラエボで生まれました。現在のボスニア・ヘルツェゴヴィナの首都です。1984年の「冬季オリンピック」が開催された場所として記憶に残っているかもしれません。私はこの祭典のテーマ曲を作り、メダル授与式で歌い、ユーゴスラビア芸術大賞を頂きました。日本でも報道され、それがきっかけとなり、1988年に来日しました。

ところが、来日中にユーゴスラビアで内戦が勃発し、パスポートが無効となり帰国できなくなってしまいました。スティーヴン・スピルバーグ監督の映画『ターミナル』の主人公と同じ状況に陥ったのです。私は空港ロビーで暮らしていたわけではありませんが…。

自分の国が、生まれた国が無くなったのです。パスポートもなく、国外に出ることもできません。昨日までユーゴ人だったのに、明日はどこの国の人間になるのか。そんな折、祖国の母が病気で亡くなりました。

私の最初のアイデンティティは、美術史を専攻していた母から受けた教育でした。母の出身地であるアドリア海沿岸地方で幼少期を過ごし、サラエボで哲学と絵画を学びました。ミュージシャンとなってヨーロッパの音楽祭にもたびたび参加するなどしたおかげで、5〜6カ国語が分かるコスモポリタンになりました。

私のファミリーは、昔からあちこちの場所に住んでいました。みんなそれぞれの人生を送っていて、親戚もサラエボだけではなく、クロアチアにも、セルビアにも、ドイツにもいました。ファミリーとその周りには、芸術家や先生などの文化的な人たちが沢山いました。母が好きだった“HAIKU”と“UKIYOE”を通して日本を知りました。日本文化にひそむ究極のシンプルネスに、高い芸術性を感じて、日本語を知る前から『HAIKU』という曲を作ったりしていました。

こうした異文化への興味やあこがれは、祖国ユーゴスラビアの姿とも深い関係にありました。アジアとヨーロッパをつなぐバルカン半島に位置し、違う言語と文化をもつ6つの国が集まってできたユーゴスラビアは、社会主義国家でありながら、ゆるやかな統治が行われていて、とても住みやすい国でした。ポーランドやチェコやハンガリーなどのように、ソ連の存在がかなりのプレッシャーだった国とは違っていました。このバルカン地域はヨーロッパでたぶん一番面白いところではないかと思います。様々な時代の東西文化が混交し、いろいろなフィロソフィーが入っています。サラエボも小さな町でしたが、大昔から様々な民族が一緒に暮らしていました。そのため、独特なカルチャーがあったように思います。

1991年の政変で祖国ユーゴスラビアは解体され、6つの国はそれぞれ独立しました。今、時が過ぎて「ふるさと」はまた平和を取り戻しました。そして私は、悲しみを乗り越え新しい光を見ています。大切なものとは何か、かけがえのないものはどこにあるのか、やさしいものがどんなに強いか、私はそれを、身をもって知り、今、自らの曲に込めて歌っています。

近年、内戦で崩壊した美しいモスタルの橋が復元されました。川に落ちた大理石は市民の手で拾い上げて、元通りにしたようです。そしてまた、多くの人々が行き交うようになりました。シビルエンジニアにとっては、本当の意味の橋をつくることがものすごく大事です。渡れる橋をつくり、そして、その橋が人々の心をつなぐ橋となることが、何よりも素晴らしいことだと思います。

ボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボの旧市街広場(写真:村山千晶)